

コラム②

ハゴロモホトトギスとの出会い、天人峡

2018の夏、未知との出会いを。ハゴロモホトトギスの道内唯一の生育地の天人峡に向う。7月26日、東川町で33.4℃、無風の天人峡は31℃の猛暑だった。

ハゴロモホトトギスは改訂新版日本の野生植物I（平凡社2015）でユリ科ホトトギス属タマガワホトトギスの変種と記載され、分布は本州（東北地方）と北海道である。本棚の「北海道植物図鑑（原松次）」、「新北海道の花（梅沢俊）」、「原色牧野植物図鑑（牧野富太郎）」、ヤマケイ「日本の花（佐竹義輔）」やドカベンシリーズ「日本の野草（林弥栄）」にも写真が無い。最後の砦が梅沢俊氏の最新刊「北海道の草花」、39pに個体や花の拡大写真と特徴が解説され、頼りになります。

生育地を訪ねてみよう。天人峡のトムラウシ山登山道の入山届記入台から、通称「三十三曲」のとんでもない急斜面をスイッチバック式で直登する標高差310mの壁だ。その登山道の両側で林床植物と混生している。羽衣の滝遊歩道では、鉄柵の山側の2カ所で高茎植物と混生していた。いずれも木漏れ日が差し込む湿った、または地下水が滲む斜面で、乾燥地や完全に被陰される環境を好まないようだ。

植物体は高さ60-80cmで茎は無毛で緑色、葉は互生して広楕円形で先が尖り、茎を抱く。花は茎頂に集散状に

付き、ユリ科らしく外花被片が3枚で幅広く、基部に大きな膨らみがある。内花被片の3枚は幅が狭く、雌しべは黄色で柱頭が3裂、さらに先が2裂して腺点が光る。雄しべは6本で白色の花糸の先に黄色の葯が外向きに付く。ランナーを出して子苗を産生するが密生群生せず、花後は花柄だけの個体が多く種子繁殖の効率は悪いようだ。

登山道と遊歩道で個体数を数えた。20cm以下の幼個体や見落とし個体もあるが登山道では1カ所で3-5個体から50個体ほどが散在している。遊歩道では35-60個体が群生して、両地区の総個体数は344個体、102開花+花落ち花茎で意外と多かった。幼個体を加えると500個体を超えると推定する。これらが林床植物と混生して、良く似たオオアマドコロやオオバタケシマランも生育して花期以外は全く気付かない。花期でもあの急坂途中で、羽衣の滝に心を馳せ、散策者は多くても素通りで、盗掘リスクは低いでしょう。

基本種はタマガワホトトギスで、葉の裏の葉脈に毛がある変種で学名が *Tricyrtis latifolia* Maxim. var. *makinoana* (Tatew.) Hiyama、舘脇操北大名誉教授が牧野富太郎博士の米寿を祝い、献名して植物研究雑誌記念号（1949）に発表した由緒ある植物です。（写真は56ページに掲載）

（佐々木純一）